

熊本城 復興に向けて

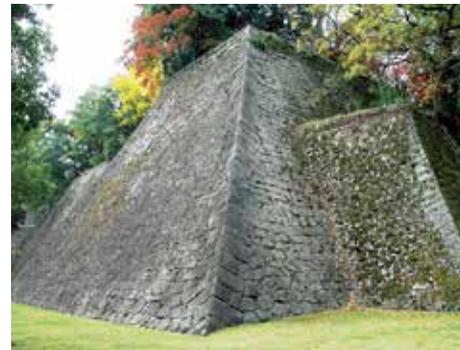
〈1〉江戸時代の災害と復興

平成28年4月14日の前震に始まった熊本地震では、熊本城は石垣50か所が崩落し、重要文化財建造物13棟すべてが被害を受けました。積み直しが必要な石垣の面積はおよそ23,000㎡で、全体の3割におよびます。熊本城の歴史上、最も大きな自然災害となった熊本地震ですが、熊本城が被災したのは今回が初めてのことでありません。築城以来、地震や大雨洪水、台風といった自然災害や戦争で、熊本城は何度も被災してきました。その度に修理し、熊本城を守り伝えてきた人々の存在を忘れることはできません。

熊本城が築城されたのは、今からおよそ400年前のことです。はじめて大きな地震に直面したのは、城の完成から18年後の寛永2(1625)年。加藤清正の息子、忠広が藩主だった時期です。当時、小倉藩の細川家から熊本へ送られた使者が、小倉に戻って熊本城の被害を報告しています。その様子は、「万覚書」(永青文庫所蔵)という記録に残されています。これによると、6月17日夜に地震が発生し、熊本城の天守や屋敷の瓦などが落ち、「煙硝倉」(火薬庫)の爆発により周囲およそ800mの屋敷が吹き飛ばす被害がありました。この地震での城内の死者は、50人にのぼったといえます。

加藤家はこの地震被害の復旧に執りかかりましたが、寛永9(1632)年に領地を没収され出羽庄内(山形県)へ移り、代わりに小倉から細川忠利が藩主として熊本城へ入りました。翌寛永10(1633)年にも熊本では地震が発生し、忠利は高い石垣と櫓・天守が密集している熊本城では「あぶなくて庭のない本丸には居られない」と言うほどでした。実際に、この年の5月には本丸東側の石垣がおよそ30mにわたって崩れています。その後、忠利は地震が発生した時に避難する「地震屋」と呼ばれる建物を計画し、寛永11(1634)年には破損した石垣や建築物の修理を含む、熊本城の改修に取り組みました。

その後も熊本城は相次いで災害に見舞われます。寛永17(1640)年には大雨で本丸東側の石垣3か所が膨らんだ状態になりました。



▲櫓方三階櫓台



石垣に刻まれた文字▶
「文政五年六月 竣功」

さらに、寛永21(1644)年の洪水では石垣や櫓・塀の数か所が崩れました。

被災のたびに、熊本藩は江戸幕府に城の修理の許可を願う書類を提出し、許可を受けて修理しています。江戸時代に石垣修理は約20回記録されていますが、およそ半分が災害からの復旧です。当時の人々が熊本城を修理してきた痕跡は、いろいろな場所で見ることができます。例えば、櫓方三階櫓台(現加藤神社東側)は文政3年(1820)12月に幕府へ石垣の積み直しを申請した時に作成した絵図の写が残っており、石垣には「文政五年六月 竣功」の文字が刻まれています。

江戸時代、加藤家と細川家によって維持されてきた熊本城は、明治維新を迎えてどのように残されてきたのでしょうか。これから、24回にわたって熊本城の災害と復興の歩みや、現在の復旧の様子についてお伝えしていきます。